



株式会社  
キーン・アンド・コミュニケーションズ代表取締役

(沖縄振興開発審議会委員)

## 残間 里江子

何故、これほどまでに沖縄が好きになっただろう。できれば、人生の終盤は沖縄で過ごしたいとさえ思っている。

友人の何人かも同じように考えていて、中でも、「老後を楽しく過ごす友の会」のメンバーとは時々誘いあって沖縄に行き、「理想の場所」探しをしている。

初めて沖縄を訪れたのは返還の年の夏だった。女友達二人との気楽な旅で、ひめゆりの塔も首里城にも立ち寄り、二泊三日、若さにまかせてビーチでひたすら肌を焼いていた。

そうはしてはいても、私の頭のどこかに反戦運動に熱心だった親に育てられた影響もあって、沖縄の人たちに対する「阿責」は否めなかった。

女三人連れ立って米軍払い下げショップへ行き、軍服の古着やコロンバット・ウオッチを買った時にはさすがに気が咎め、胸の奥底に小さな痛みが走った。

その後、女性誌記者時代に取材で行ったのも含めれば三十回くらいは訪れたろうか。

# 沖縄の振興 「目利きの大人たち」 の楽園創り

行くたびに新たな沖縄のよさを発見し、家を買つのは無理でも、せめて毎年最低一週間は行ける身分でいたいものだと思っている。

そんな私からすると、沖縄には振興して欲しいような欲しくないような複雑な気持ちだ。

振興そのものを悪いとは言わないが、この時代、「振興」というと、どうしても産業経済と直結しての言葉に聞こえてくるせいであらう。何となくはなして抵抗を覚えるのである。確かに経済の伸長で解決のつくこともあるが、一律に奮い立たせた結果、魅力が平板になつてしまった場所のなんと多いことか。

沖縄は自然も景観もいいが、魅力の最たるものは、人だと思ふ。ここまでの約三十年、沖縄各地でいろんな人たちが出逢ってきたが、時間の流れ方が違ふのか、大らかな人が多かった。ガツガツもなければ「コセコセ」もなく、一緒にいるだけで気持ちや和らぐ人ばかりだった。

地域創造に限らず、何をやるにも基本は、人だと思ふ。

全てをやり尽くしたかに見えるこの時代はなおのこと、「人」という原点を見据えるべきなのではないだろうか。

沖縄を政治的、経済的に動かしている人たちが、振興について話す時、基地問題やインフラ整備に代表される野太い議論が中心になりがちで、「人」は後回しになっているような気がする。国の金瓶かねがめが枯渇し、そう

すとお金を出せる状況ではない今だからこそ、時代の価値観にフォーカスを当てた、「人の想い中心」の施策が活きるのだ。

バブル崩壊以後、突き詰めると、人の心を動かしているのは、「不老長寿」と「自己実現」の二つである。

「不老不死」は無理でも、「長寿」はその気になれば可能だ。百歳以上の人が一万人を超えたあたりから健康不安が増大しているというのも人間の性なのだろう。生物体としてそこまで行けるのなら、あとはその人次第といふわけだから、その気になつた人は長寿のためにはお金も時間も進んで供出するのである。

もともと「不老長寿」のための素材がいっぱい詰まっている沖縄は、ウエルネス・プロメントも盛んだが、高齢化の波との兼ね合いで「健康」というアイテムをもっと本格的に捉えてみてはどうだろう。

一方、「自己実現」欲求はまだ見ぬ自分と出逢いたいというものだが、最近では見聞を広めるだけでなく、学んだことを他者に向かつて表現したい、というふうな形が変わっている。

こうした気持ちと、まだ拓ききつてはいない沖縄の歴史や文化を繋ぐ策も本気で考えていい時期に来ているように思ふ。

この先の人口動態から言っても、沖縄を若者ターゲットと決めつけず、マジリニティーを構成しつつある、目利きの大人たち「の楽園になるよう時間をかけて創り上げて欲しい」。